

第2章

根拠に基づく子どもへの支援

第1節 社会性発達を促す事例

【事例の概要】

Y児（男児）は、1、2歳児クラスのころから落ち着きがなく、奇声を上げて走りまわったり、むやみに物を投げたりすることが多かった。登園時は必ず激しく泣き、4歳まで続いた。Y児が3歳児になると、衝動的な行動や友だちのトラブル、集団に入れられないなど、他児との差が顕著になる。

保護者は、母1人で仕事をして、1人で育てているので早く自立させなければいけないと必死で、かえって何でも自分でするようにと、放っておくことが多かった。担任もY児をどのように支援していくか悩んでいた。

そこで、支援設計を作成し、発達評価ツールを保護者と一緒にチェックし、Y児の現状を知ってもらい、かかわり方を見直して頂き、保育園でもモンテッソーリ活動を中心に保育士と常にかかわるようにした。

5歳6か月になった現在は、多動もかなり落ち着き、喧嘩もなくなった。保護者もパートナーができ、協力して育児をしており、Y児の行動を見守っていけるようになってきている。

第1項 エンパワメント支援設計

本事例は、Y児は落ち着きがなく、集団での活動に入れられない、保護者の育児観にすれを感じるという担任の発言から支援設計が始まった（図2-1）。

<第1ステップ 目標を設定する>

「発達評価ツール」「気になる子ども支援ツール」でY児の現状を確認し、「育児環境評価ツール」や「個人面談時の記録」から保護者の育児観を確認した。

Y児は、友だちとのかかわり方や言語面等で、わかりやすい保育環境が必要と考えられた。さらに、保護者の保育観とY児の現状とのずれがあるので、保護者にも現状を知ってもらい、Y児へ肯定的なかかわり方をしてもらう必要があり、以下のように目標を設定した。

<大目標>

- ・集団の中で落ち着いて過ごすことができる。
- ・保護者が子どもとのかかわり方を知る。

<小目標>

- ・手を出す前に自分の思いを言葉で表現できる。

- ・落ち着いてじっと話を聞ける。
- ・相手の感情を汲み取り友だちのじゃまをする、たたく、動きまわる等の衝動的な行動がなくなる。
- ・1つのことに注意を持続できる。
- ・保育士の指示を理解できる。

達成時期

大目標は卒園まで、小目標は1年後とする。

達成時期の評価法

- ・園児総合支援のツールの活用
- ・保育の記録

<第2ステップ 現状を把握する>

Y児は、落ち着きがなく集団活動時は話を聞くことが出来ずウロウロしたり、保育士が全体で指示したことも理解しておらず、みんなと一緒に行動できず、友だちをたたいたり、友だちを触って活動のじゃまをすることが多かった。自由遊びの時も、友だちと一緒に遊ぶことは多いが衝動的でトラブルも多い、Y児は1日の生活の中でわかりづらいことが多くて落ち着かないのではないかと、友だちとも仲良くしたいが、その方法がわからないのではないかと想定される。

年齢：4歳0か月 身長：101.6cm 体重：16.5kg	運動発達：粗大運動 4歳8か月 微細運動 4歳4か月 社会性発達：生活技術 4歳8か月 対人技術 2歳9か月 言語発達：表現 3歳9か月 理解 3歳9か月	育児の状態 主な養育者：母 家族構成 実母・母 本児 3人家族
-------------------------------------	--	---

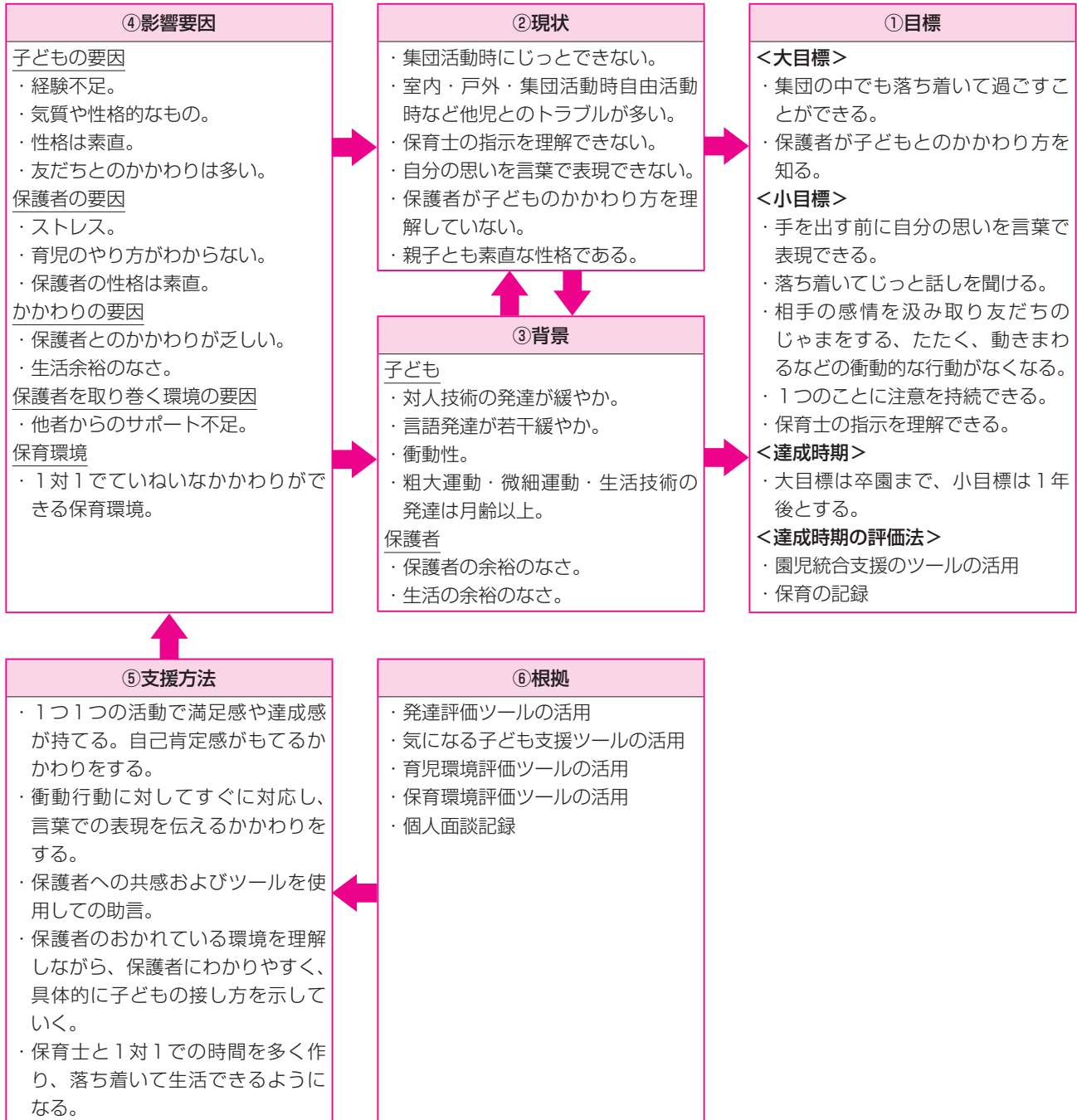


図2-1 エンパワメント支援設計(社会発達を促す事例)